

日本農学アカデミー発足前後のいきさつ

山崎 耕宇

日本学術会議第 17 期第 6 部副部長・東京大学名誉教授

日本農学アカデミー設立の経緯については、行政改革に巻き込まれた当時の日本学術会議第 17 期（1997～2000 年）の波乱含みの状況をもふまえて、松田藤四郎氏が詳細に記述しておられる（日本農学アカデミー会報、第 17 号：11－16、2006 年、以下：松田論文）。その記述の中でも触れられているように、同アカデミーの設立とその後の運営は、かならずしも順調に運んだわけではなかった。ここでは第 17 期の第 6 部副部長として、同会の設立に関わった 1 人として、この間のいきさつについて思い出すところを述べておきたい。

やや年次がさかのぼるが、第 15 期（1991～1994 年）のころ、日本学術会議の第 5 部（工学）、第 6 部（農学）、第 7 部（医学）の会員が中心となって、科学技術政策基本問題研究会（以下：“研究会”）という NGO が設立され活動していた。日本学術会議がどちらかといえば大所高所からの理念的な提言や意思表示をおこなっていることに対して、“研究会”ではそれぞれの関連領域の有識者との意見交換を通じて、より具体的な政策を研究し、これを各部会を通じて学術会議の活動に反映させていこうとするものであった。

第 16 期の志村博康第 6 部長にすすめられて私も“研究会”に加入し、その農学部会（学術会議の第 6 部長が部会長）に所属して活動に参加した。主として東京近辺在住の学術会議会員や会員 OB、日本農学会の役員や農林水産技術会議事務局の主要メンバーなどが加入して、時おり集まって研究会を開催し、あるいは農林水産技術会議のメンバーや関連国会議員とも意見交換するなど、活発な活動が続けられていた。志村氏の急逝後は、後任の北村貞太郎第 6 部長が農学部会長を継いでいた。

第 17 期の第 6 部会長になった長堀金造氏は、上記“研究会”についてご承知

のことではあったが、同期の大橋秀雄第5部長の提唱されたアカデミー構想に強く共鳴し、農学アカデミー設立に向けて活動を開始された（詳細は日本農学アカデミー会報、第2号：11-14, 2000年を参照されたい）。このアカデミー構想は1987年に設立された工学アカデミーの事例をもとに、日本学術会議の各部がそれぞれの領域の有識者らなるアカデミー（NGO組織）の支援を受けながら活動すれば、官制の学術会議では期待できないより豊かな効果を生むことができようという構想で、各部それぞれにアカデミーの設立を促したものである。

この構想の目指すところは、さきに述べた“研究会”の各部会が目的としているところと、名称は違ってもほとんど異なるところはないと理解することができる。そうしたことから長堀第6部長が農学アカデミーの設立を提案された当初から、私はまず“研究会”の北村農学部会長と十分話し合っ、できれば“研究会”を発展的に包摂する形でのアカデミーの設立を考慮すべきではないかと、繰り返し部長に申し入れていた。しかし理由は定かでないが、両氏がこの件で話し合われた形跡はなかった。

そうこうしているうちに第7部関連で日本医歯薬アカデミーが結成されたとの報告が入り、いそいだ長堀部長は1998（平成10）年夏の第6部会で、農学アカデミー設立を主要議題のひとつに取り上げ、最終的には審議打ち切りのかたちで設立の承認を取り付けられた。この間、私は第6部の雰囲気壊すこともはばかられ、また地方出身の会員に“研究会”の実態を周知する機会を十分もてなかったため、強く抗議することはできなかった。私の不徳のいたすところであったが、私にとって何とも腑に落ちなかったことは、NGOの立ち上げという案件を部会の組織決定事項とし、しかも第6部の全員がこれに加入するという処置が講ぜられたことである。なお追記しておく、上述の日本医歯薬アカデミーが設立されて活動したという話を、私は現在に至るまで聞いていない。

この結論をもとに同年11月には農学アカデミーの設立総会が開かれ、日本学術会議副会長として超ご多忙のため第6部会に出席されることが少なく、この間の事情をご存じない佐々木恵彦氏が会長に推挙される結果となった。こうした結果を受けて案の定、“研究会”の主要メンバーである日本農学会や各学会の役員、あるいは農水省の試験研究機関の指導的研究者からは猛反発が起こり、ボ

イコットの働きかけもあったと聞いている。私は当事者の 1 人として、これら諸先輩からは折あるごとに非難のまなざしを受けるつらい日々が続いた。発足した農学アカデミーは形式は整えたが、主要メンバーは全国大学農学部長会議関連の方々がほとんどで、片肺飛行どころか、3分の1飛行という状態が続いた。

学術会議が第 18 期に入り、こうした状況を憂慮された第 6 部副部長の松田氏のご配慮により、関係者が集まって“手打ち式”ともいべき会合がもたれたことは、松田論文に記されているとおりである。発足から 3 年の歳月がかかったが、これによってオール農学のアカデミー活動が軌道に乗り、現在の活発な活動につながってきたことは、そのいきさつに関わったものにとっては感無量のものがある。ただし北村氏はついにアカデミーへの加入を拒否されたままで、長堀氏もまたしばらくの後に退会されている。